

2015 6/23

No.1997

毎月第2・第4火曜日発行

政経 かながわ

一般社団法人
— 神奈川政経懇話会 —



初夏に見られるクサフグの産卵の観察会が4日、横須賀市浦郷町の深浦湾内で行われ、親子連れなど約170人が生命の神秘を見守った。



視点・点描	3
現住所は「富士山」の71歳	
政治	4
安倍氏圧勝なら保守化加速 自民総裁選、リベラルの影薄く	
国際	6
ミャンマー、AIIBへ期待感 日本企業のインフラ受注に懸念	
科学	8
産業界で広がるスパコン利用 2020年に「ポスト京」開発	
暮らし2015	10
衣替え、冬物の整理整頓を	
広告珍談	12
マンガのキキメは③ また、なめた!	
NNAアジア経済レポート	13
神奈川景気データファイル	14
神奈川景気データファイル	15

事務局だより

◇横浜定例講演会

2015年7月9日(木)

13時30分～15時

崎陽軒本店 5階「マンダリン」

講師は日本レストランエンタプライズ「駅弁マイスター」の

三浦 由紀江 氏

演題は「仕事は楽しく 自分に限界をつくらない」(仮題)

◇横浜定例講演会

2015年8月10日(月)

13時30分～15時

ホテルモントレ横浜 3階

「ビクトリア」

講師は東京大学名誉教授、
火山噴火予知連絡会会長の
藤井 敏嗣 氏

演題は「日本の火山活動の現状と今後」(仮題)

視点 点描



現住所は「富士山」の71歳

1年間に200回ほど富士山に登る。6月からのシーズンはほとんどを山で過ごす。日に山頂を2

往復する荒技を軽々とやつてのける。山小屋の主人がなりわいというわけではない。横浜市鶴見区出身の実川欣伸さん。写真(ロプチェのキャンプ、5200メートル) 71歳、登山家である。自身のツイッターで現住所を「静岡県沼津市または富士山」と書く。風のように、

ひゅーと山道を駆け抜ける姿を見かけた方も多いだろう。なぜそこまで好きなのか、こだ

わるのか。登山家と鉄道ファン相手には尋ねたくなる。両者とはときに一般の理解を超える。「そこに富士があるから」なんていう英国の登山家流の答えはない。実川さんが登る動機は、富士登頂の最多記録更新である。挑戦するアスリートなのだ。これまで最も多い

年は年間248回。この原稿を書いた時点で累計は1780回。シーズンさなかゆえ、現在は1800回を超えているかもしれない。

世界7大陸の最高峰7座を登頂する「セブン・サミッター」を目指す。2000年のキリマンジャロ(アフリカ)から06年のビンソン・マシフ(南極)まで既に6座登頂に成功している。残るはエベレスト(8848メートル)だけ。

そのエベレストに昨年春、挑戦したが大規模な雪崩の影響で断念。この4月に再チャレンジ、今度はネパール大地震で断念した。5350メートルのベースキャンプですさまじい雪崩と爆風に遭い、「もうだめか」と覚悟した。

失意のまま帰国し早速、富士登山を再開した。来春のエベレスト再々挑戦へ意欲満々だ。心臓に不整脈がありペースメーカーを装着

している。「それでもエベレスト登頂に成功すれば障害者の方々に勇気をあげられるのでは」と。

山ひと筋の人生ではない。家庭の事情で鶴見区の市立中卒業後に就職した。その後、学び直し私立高の夜間部、私立大の法学部へ進み、建設会社、住宅メーカーに勤めた。リーマンショックで定年後のパート仕事を失った。苦労人の心を支えたのは、丹沢、富士山、エベレストだったそうだ。

(神奈川県新聞社統合編集局長

小野 明男)



また、なめた!

図をどうぞ。

1950(昭和25)年2月、朝日新聞に掲載されたマンガ広告。

作者は《サザエさん》で知られる長谷川町子である。

朝日新聞の掲載マンガ《サザエさん》は、磯野家という3世代がいつしよに暮らす、ごく平凡なサラリーマン家庭。この日、事件が起きた。

家つき女房のサザエさんが、赤ちゃんを抱っこして、エプロン姿のお母さんとフスマをがらりと開けた。と、入り婿のマス夫と子どもたちが、丸いおぜんをかこんでペロペロ。サザエさんは「アラ またなめてる! 坊やのドラ イミルクよ!」

これはもう、犯行現場をおさえられて、カンベンカンベント。

長谷川町子は1920(大正9)

年生まれ。《のらくろ》で有名な田河水泡すいほうに師事。太平洋戦争終戦

の翌年、46(昭和21)年から74(昭和49)年までの28年間、朝日新聞

に《サザエさん》を掲載した。まだ敗戦直後、ほのぼのとした家庭

マンガは全国的なヒット作であった。

この1コマは、まことに的である。な

にしろ終戦から5年暮らしに、母乳の出

もかんばしくなく、

ドライ・ミルクが母親の助け舟であっ

た。それをペロペロするとはなにぞとぞ。

朝日新聞の連載マ

ンガを通覧しよう。東京版は1923(大正12)年10月から2年間、

樺島勝一の《正チャンの冒険》。

大阪版はアメリカのマンガ《ジグ

ストマギー》。つぎが麻生豊《人

生勉強》(前回連載を参照)、田中

比左良《当世ヤングマダム》、武

井武《赤ノッポ青ノッポ》。36(昭

和11)年10月から9年間、横山隆

一の《フクちゃん》シリーズ。戦

争直前は平井房人の《思ひつき夫

人》。戦時中は紙面数も少なく、マンガ連載はなし。

戦後になって49(昭和24)年1

月から3年間、チック・ヤングの

《ブロンディ》。アメリカの市民生

活にあこがれた。平行して《サザ

エさん》の長期連載。51(昭和

26)年2月から66(昭和41)年3

月まで根本進の《クリちゃん》、

岡部冬彦の《プリンセス マコ

ちゃん》とつづいて、65(昭和

40)年4月から91(平成3)

年9月まで、サトウサンペ

イの《フジ三太郎》。小島

功の《ブンブンキーン》、

園山俊二の《ベエスケ》と。

行数がなくなつたのでおし

まい。それにしても日米と

もに4コマ、どうしてなん

だろ。

(美術エッセイスト、茅ヶ

崎市在住)(図)森永ドライ

ミルクの広告・1950(昭

和25)年2月、朝日新聞掲載

